

シャワーのベッドへマミーを押し倒し、  
衣服を脱がす。

「あ、あの…先生、  
これ以上は…！」

シヨーツに手をかけると、  
シスターの彼女は流石に抵抗した。

ドキン

ドキン

ドキン

ドキン





ドクッ

あ!!

ビクッ

「ほ、ほんとに、ダメっ…!!  
そこは、見ないでくださいっ!!」  
それでも無理やり脱がすと、  
マリーは必死に局部を隠そうとする。

お

ガッ

クッ



やっこの事で手をどかすと、  
彼女は目を逸らして羞恥に震えた。

「マリィのおまんこが、  
毛が濃くてかわいいね。」

「うっっっ……  
あんまり、まじまじ見ないで……。」

匂いを嗅ぐと、おしっここの強い臭いがした。

「ひゃっっっ……」

カマ……

バク  
バク  
バク

うっっっ……

「ほ、ほんとうに……  
無理です、そこは……。」

「そっだね。マリィはシスターだものね。  
マリィが嫌なら、今日はもうやめようか。」

「いいいえ……先生が、  
嫌というわけでは……。」

バク  
バク  
バク

カバ  
カバ  
カバ

ト  
ト  
ト



「嫌じゃないの？  
それならもう、挿れちゃうけど。」

ローションをつけて又ル又ルにしたモノを  
彼女の局部へと押し付ける。

「ひあつ！？  
ま、待って！  
待って、待って！  
せめて、避妊具を…」

ひあつ

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク





「はぎやあつ♡  
お、おなか、があつ♡  
やぶれっ♡♡」

無理に挿れたにも関わらず、  
マリィの上げる悲鳴は段々と  
甘い声に変わって行く。

はぎやあつ♡

あ♡

あ♡  
あ♡  
あ♡

あ♡  
あ♡  
あ♡  
あ♡

あ♡  
あ♡  
あ♡  
あ♡

あ♡  
あ♡



「マリー、もう我慢できない！  
中に出していいマ！」

「せ、せ、せ、いたいっ…♡  
ダメっ♡♡  
だめ、ですからねっ♡」

彼女の目は、言葉とは裏腹に  
期待に満ちていた。

ズッ

あ♡

グッ

ド  
チ  
ッ

あ♡

ズッ

ズッ





おっおっおっ

おっおっおっ  
おっおっおっ  
おっおっおっ  
おっおっおっ

おっ

おっおっ  
おっおっ  
おっおっ  
おっおっ  
おっおっ



「うわー。下品な真つ黒モジヤま〇こになつたね、それにひどい臭いだよマリィ。乳首も擦れすぎて真つ黒だ。」

「うっ...♡先生が、こうしたんでしよう...。」

「そっだね。でも立派なシスターになるには、ヤリマシの子も理解できるようにならないと...でしょ？」

「もう...♡いい加減な事言つて...♡」

ドクン♡

ゾク...♡

うっ...♡

ドクン♡

ムン...♡

ズチ...♡

くんくん...



「ほら、マリーの大好きなぶつといおち○ち○ご馳走してあげるよ。いっぱい食べてね。」

「あはあ...♡待って、ましたあ...♡」

ズキ

ズキ

ズキ

ズキ...♡

ズキ

ズキ...

ズキ...





かつてとは違い、抵抗は薄く  
スムーズに入っていくが：  
腹を中から突き上げられる衝撃で、  
やはりマリーは悲鳴を上げる。

おっおっおっ

ニクキッ

おっおっ

グ  
リ  
コ  
ン  
バ

ド  
タ  
タ  
ッ

ッ  
ッ

「どうして？  
気持ちいい？  
マリー！」

「はいっ♡  
せんせいのぶつとい  
ち○ポっ♡  
わたりの使い古し真っ黒ま○ニト  
びつたりフィットしてますっ♡」

「あんの♡」

「あんの♡」

「バクッ」

「クッ  
クッ  
クッ」

「ハッ  
ハッ  
ハッ  
ズ  
ズ  
ズ」



「まったく私の好きな卑しい  
ヤリマンシスターになったね！  
ご褒美たくさん注いであげるよー！」

「あはっ♡  
うっ♡  
うれしいうっ♡  
ですっ♡たくさん注いでっ♡  
わたしを♡はらませてくださいうっ♡  
せんせいうっ♡」

んっ♡  
ゴリユツ

ムキムキ

ムキムキ  
ゴリユツ  
ゴリユツ  
ゴリユツ

ゴリユツ  
ゴリユツ  
ゴリユツ  
ゴリユツ





お風呂の湯が熱い

お風呂の湯が熱い

お風呂の湯が熱い

お風呂の湯が熱い

「ありや。  
精液が詰まっちゃって、出てこないね。  
このお腹で帰ったら、サクラコたちに  
怪しまれちゃうよ。」

「え…何を…?」

「たまった精液全部出せるように、  
助けてあげるね。」







びびり びびり

「あはあっ♡  
で〜で〜のううっ♡  
しきゆうからあっ♡  
しゃせいしちゃううっ♡  
」♡♡♡

びびり

あはあっ♡

びびり  
びびり  
びびり  
びびり  
びびり

びびり  
びびり  
びびり  
びびり

びびり

「ふふ、マリーは本当に私好みのクソビッチだね。今日は2つの穴両方で拳の味を覚えて帰ろうね。」

「はひい...♡  
おねがい、ひまじゅ...♡」

はあ...♡

はあ...♡

ひく、

ひく、

ん...♡

ん...♡

ん...♡



そんなこんなで、好きに遊んだ彼女の肉穴は  
悲惨な事になっていた...

「あーあ。やりすぎちゃった。  
あとは自分で中身戻しておいてね。」

「はひゃあ...♡  
ありあと、あいりましたあ...♡」

ビク♡

はひゃあ...♡

ドコ...

ビク♡

あふ...♡

ビク♡

ビク♡

ドコ...

イビヒ...

てちん...











































ガ  
バ  
マ  
ン

徳川

くさね



便器  
↓  
故障中

シャワーのベッドヘッドマシーンを押し倒し、  
衣服を脱がす。

「あ、あの…先生、  
これ以上は…！」

シヨーツに手をかけると、  
シスターの彼女は流石に抵抗した。

ドキン

ドキン

ドキン

ドキン





ドクッ

ビクッ

アッ!

クッ

クッ

クッ

それでも無理やり脱がすと、  
マリーは必死に局部を隠そうとする。  
「ほ、ほんとに、ダメっ……!!  
そこは、見ないでくださいっ!!」

やっこの事で手をどかすと、  
彼女は目を逸らして羞恥に震えた。

「マリィのおまんこが、  
じゅじゅじゅじゅかわいいね。」

「じゅじゅ……  
あんまり、まじまじ見ないで……。」

匂いを嗅ぐと、おしっここの強い臭いがした。

「ひゃっ……。」

カマ……

バク  
バク  
バク

フ……!

カバ  
カバ  
カバ

ト  
ト  
ト

「ほ、ほんとうに……  
無理です、そこは……。」

「そっだね。マリィはシスターだものね。  
マリィが嫌なら、今日はもうやめようか。」

「いいいえ……先生が、  
嫌というわけでは……。」

バク  
バク  
バク



「嫌じゃないの？  
それならもう、挿れちゃうけど。」

ローションをつけてヌルヌルにしたモノを  
彼女の局部へと押し付ける。

「ひあつ！？  
ま、待って！  
待って、待って！  
待って、待って！  
せめて、避妊具を…。」

ひあつ

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク





「はぎやあつ♡  
お、おなか、があつ♡  
やぶれっ…♡」

無理に挿れたにも関わらず、  
マリィの上げる悲鳴は段々と  
甘い声に変わって行く。

はぎやあつ♡

あつ♡

あつ♡  
あつ♡  
あつ♡

あつ♡  
あつ♡  
あつ♡  
あつ♡

あつ♡  
あつ♡  
あつ♡  
あつ♡

あつ♡  
あつ♡



「マリー、もう我慢できない！  
中に出していいマ」

「ぜ、ぜったいっ…♡  
ダメっ♡  
だめ、ですからねっ♡」

彼女の目は、言葉とは裏腹に  
期待に満ちていた。

あ♡

ズッ

グッ

ド  
チ  
ッ

ぽっ♡

ズッ  
ズッ

ハ  
ッ





オオオ

ドクドク  
ドク  
ドク

ドクドク  
ドク  
ドク

ゴッ

ドク

最初の性交から半年ほど経ち…  
彼女はすっかり私好みのビッチに変わっていた。

「マリィ、今更何を恥ずかしがってるの。  
私にその隠してるグロマ〇を見せて。」

「は、はい…♡♡  
せんせい…♡」

ドキッ♡

ドキッ♡

ドキッ♡

ドキッ♡

んっ♡



「うわ〜。下品な真つ黒ま〇こになったね、それにひどい臭いだよマリィ。乳首も擦れすぎて真つ黒だ。」

「うっ…♡先生が、こうしたんでしよう…。」

「そっだね。でも立派なシスターになるには、ヤリマシの子も理解できるようにならないと…でしょ？」

「もう…♡いい加減な事言って…♡」

ドクン♡

グク…♡

うっ…♡

ドクン♡

ムン…♡

ズン…♡

クンクン…♡



「ほら、マリリーの大好きなぶつといおち○ち○ご馳走してあげるよ。いつばいい食べてね。」

「あはあ...♡♡♡待って、ましたあ...♡♡♡」

ズキ

ズキ

ズキ

ズキ...♡

ズキ

ズキ...

ズキ...





かつてとは違い、抵抗は薄く  
スムーズに入っていくが、  
腹を中から突き上げられる衝撃で、  
やはりマリーは悲鳴を上げる。

おっおっおっ

ニクキッ

おっ

ゴッ  
ゴッ  
ゴッ

ッ  
ッ

ドッ  
ドッ  
ドッ

「どうして？  
気持ちいい？  
マリー！」

「はいっ♡  
せんせいのぶつとい  
ち○ぽっ♡  
わたりの使い古し真っ黒ま○んた  
ぴつたりフィットしてますっ♡」

「あんの♡」

「あんの♡」

「バクッ」

「クッ  
クッ  
クッ」

「ハッ  
ハッ  
ハッ  
グ  
グ  
グ」



「まったく私の好きな卑しい  
ヤリマンシスターになっただね！  
ご褒美たくさん注いであげるよー！」

「あはっ♡  
うっ♡  
うれしいうっ♡  
ですっ♡  
わたくしを♡はらませてくださいうっ♡  
せんせいうっ♡」

んっ♡  
ゴリユツ

ムキムキ

ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ

ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ  
ムキムキ





「ありや。  
精液が詰まっちゃって、出てこないね。  
このお腹で帰ったら、サクラコたちに  
怪しまれちゃうよ。」

「え…何を…?」

「たまった精液全部出せるように、  
助けてあげるね。」





初めてのフィストファックに、  
一突き目では悲鳴を上げたマリリーだが、  
すぐに順応し、下品な声を上げ始めた。

パシャッ

アッ!?

アッ!?

グワッ

パシャッ

ボウッ

ボウッ



「ふふ、マリーは本当に私好みのクソビッチだね。今日は2つの穴両方で拳の味を覚えて帰ろうね。」

「はひい……♡  
おねがい、ひましゅ……♡」

はち……♡

はち……♡

ひく、

ひく、

んっ……

んっ……

んっ……



そんなこんなで、好きに遊んだ彼女の肉穴は悲惨な事になっていた...

「あーあ。やりすぎちゃった。あとは自分で中身戻しておいてね。」

「はひゃあ...♡  
ありあと、あいりましたあ...♡」「ク」

ビク♡

ビク♡

はひゃあ...♡

ドク...

ビク♡

あふ...♡

ビク♡

カ  
バ  
マ  
ン

ビク♡

總 源

くざれ きのこ

✕

便器  
↓  
故障中

ドク...

てちん

イビビ...











































カバマン

徳川

オオ

くざれまこ

便器  
↓  
故障中



シャワーのベッドヘッドマシーンを押し倒し、  
衣服を脱がす。

「あ、あの…先生、  
これ以上は…！」

シヨーツに手をかけると、  
シスターの彼女は流石に抵抗した。

ドキン

ドキン

ドキン

ドキン





トクッ

あ!

ビクッ

「ほ、ほんとに、ダメっ……!!  
そこは、見ないでくださいっ!!」  
それでも無理やり脱がすと、  
マリーは必死に局部を隠そうとする。

クックッ

クッ

お

やっこの事で手をどかすと、  
彼女は目を逸らして羞恥に震えた。

「マリィのおまんこが、  
じゅじゅとかわいいね。」

「じゅじゅ……  
あんまり、まじまじ見ないで……。」

匂いを嗅ぐと、おしっここの強い臭いがした。

「ひゃっ……」

カマ……

バク  
バク  
バク

フ……!

カバ  
カバ  
カバ

ト  
ト  
ト

「ほ、ほんとうに……  
無理です、そこは……。」

「そっだね。マリィはシスターだものね。  
マリィが嫌なら、今日はもうやめようか。」

「いいいえ……先生が、  
嫌というわけでは……。」

バク  
バク  
バク



「嫌じゃないの？  
それならもう、挿れちゃうけど。」

ローションをつけてヌルヌルにしたモノを  
彼女の局部へと押し付ける。

「ひあつ！？  
ま、待って！  
待って、待って！  
せめて、避妊具を…。」

ひあつ

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク

ドク



私は構わず力ずくで突き入れると、  
彼女の子宮口まで貫いた感触があった。



「はぎやあつ♡  
お、おなか、があつ♡  
やぶれっ…♡」

無理に挿れたにも関わらず、  
マリィの上げる悲鳴は段々と  
甘い声に変わって行く。

はぎやあつ♡

あつ♡

あつ♡  
あつ♡  
あつ♡

あつ♡  
あつ♡  
あつ♡  
あつ♡

あつ♡  
あつ♡  
あつ♡  
あつ♡

あつ♡  
あつ♡



「マリー、もう我慢できない！  
中に出していいマ」

「ぜ、ぜっいたいっ…♡  
ダメっ♡  
だめ、ですからねっ♡」

彼女の目は、言葉とは裏腹に  
期待に満ちていた。

あ♡

ズッ

グッ

ド  
チ  
ッ

びゅん♡

ズッ  
ズッ

は  
ん  
て





アッアッアッ

アッアッアッ  
アッアッアッ  
アッアッアッ

アッアッアッ  
アッアッアッ  
アッアッアッ

ホッ

アッアッアッ  
アッアッアッ  
アッアッアッ

アッアッ

最初の性交から半年ほど経ち…  
彼女はすっかり私好みのビッチに変わっていた。

「マリィ、今更何を恥ずかしがってるの。  
私にその隠してるグロマ〇を見せて。」

「は、はい…♡♡  
せんせい…♡」



「うわ。下品なグロま〇こになつたね、それにひどい臭いだよマリ。ピアスつきの乳首に相應しいよ。」

「うう...♡ 先生が、こうしたんでしよう...。」

「そっだね。でも立派なシスターになるには、ヤリマシの子も理解できるようにならないと...でしょ？」

「もう...♡ いい加減な事言って...♡」

ドクン♡

クク...♡

クク...♡

ドクン♡

ムンムン...

ズチ...

クンクン...



「ほら、マリリーの大好きなぶつといおち○ち○ご馳走してあげるよ。いつばいい食べてね。」

「あはあ……♡  
待って、ましたあ……♡」

ズキ

ズキ

ズキ

ズキ……♡

ズキ

ズキ……

ズキ……





かつてとは違い、抵抗は薄く  
スムーズに入っていくが…  
腹を中から突き上げられる衝撃で、  
やはりマリーは悲鳴を上げる。

おっおっおっ

ニクッ

おっ

ッ

ゴッ  
コッ  
バ

ドッ  
タッ  
ッ

「どっつっ？  
気持ちいい？  
マリー！」

「はいっ♡  
せんせいのぶつとい  
ち○ポっ♡  
わたりの使い古しおま○こに  
びつたりフィットしますっ♡」

「あんの♡」

「あんの♡」

「バクッ」

「クッ  
クッ  
クッ」

「ハッ」

「ズッ  
ズッ  
ズッ」



「まったく私の好きな卑しい  
ヤリマンシスターになったね！  
ご褒美たくさん注いであげるよー！」

「あはっ♡  
うっ♡  
うれしいうっ♡  
ですっ♡  
わたしを♡はらませてくださいうっ♡  
せんせいうっ♡」

んっ♡  
ゴリユツ

ムキムキ♡

ムキムキ♡  
ムキムキ♡  
ムキムキ♡  
ムキムキ♡  
ムキムキ♡

ムキムキ♡  
ムキムキ♡  
ムキムキ♡  
ムキムキ♡  
ムキムキ♡





おっぱい、おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

「ありや。  
精液が詰まっちゃつて、出てこないね。  
このお腹で帰ったら、サクラコたちに  
怪しまれちゃうよ。」

「え…何を…?」

「たまった精液全部出せるように、  
助けてあげるね。」



グッ

ビッ

ダッ

モク

グッ



初めてのフィストファックに、  
一突き目では悲鳴を上げたマリリーだが、  
すぐに順応し下品な声を上げ始めた。



ビッパ

あ、はぁあ

ビッパ

「あはぁっ♡  
で、で、で、うっ♡  
しきゅうからぁっ♡  
しゃせいにしちゃうっ♡  
「♡っ♡」

ビッパ

ビッパ

ビッパ

「ふふ、マリーは本当に私好みのクソビッチだね。今日は2つの穴両方で拳の味を覚えて帰ろうね。」

「はひい...♡  
おねがい、ひまじゅ...♡」

はあ...♡

はあ...♡

ひく、

ひく、

ダッ...

ダッ...

ダッ...

ダッ...



そんなこんなで、好きに遊んだ彼女の肉穴は悲惨な事になっていた...

「あーあ。やりすぎちゃった。あとは自分で中身戻しておいてね。」

「はひゃあ...♡  
ありあと、あいりましたあ...♡」

ビク♡

はひゃあ...♡

ドコ...

ビク♡

あふ...♡

ビク♡

カ  
バ  
マ  
ン

ビク♡

徳川 忍

くざれ ころこ

#

便器  
↓ 故障中

ドコ...

「ちゅん」

イビ...











































カバマン

徳川

くざれまこ



便器  
↓  
故障中

